

かささぎ

通信 第97号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2020年 11月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年十月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』（1996年、刈谷市教育委員会）所収の「笛」を読みました。

「笛」の初出は『赤い鳥』一九三三年二月号です。『赤い鳥事典』（2018, p.221）で酒井晶代氏は「笛」について次のように述べています。

この時期になると古典や伝承の再話など説話的傾向が強かった従来の作風に代わり、「笛」（1933.2）、「雪」（1934.1）など、子どもの屈折した心理に着眼した作品が増えていく。

「笛」の主人公は、右大臣藤原仲平の子で十二歳の少年・朱実です。朱実と同年くらい歳のシヨウガ売りの少年との出会いを通して、揺れ動く少年の心理を描いています。比叡おろしの北風の吹く中を、細い足を着物の下からぬっと出してシヨウガを売る少年と、かたや乳母に守られて着ぶくれるほど暖かくした朱実の服装の対比は、これから起こる物語の展開を暗示しています。話のあらすじは次のようなものです。

「シヨウガを買っておくれよ」と言う少年に対してうるさそうにする乳母に、シヨウガを買ってやるように言う朱実は、自分がとてもいいことをしたような気がします。二、三日後、三井寺へ参詣の帰り、牛車の中で朱実は澄んだ笛の音を聞きます。そこはあのシヨウガ売りの少年の家の前でした。少年手作りの粗末な篠竹の笛を見て、朱実はどうしてもそれが欲しくなります。あの笛さえあれば自分にもいい音色が出せると思ったからです。しかし、少年は嫌だと言って頑として渡しません。少年のおばあさんが無理矢理にもぎ取って朱実に渡すと、少年は「ああん」といつまでも泣きやみません。

笛を手にしてニコニコと家に帰った朱実は早速笛を吹きますが、「シユン」とかすれた小さな音がするきりでした。

少年の笛のような音色は出ません。朱実はむしゃくしゃして笛を庭に投げ捨てます。二、三日後、雪が積もった庭に出た朱実は雪の中に手を入れ、偶然、投げ捨てた笛に触れます。あれからシヨウガを売る少年の声も聞きません。「無理矢理に取って来てしまったから、きつと恨んでいるな。どんなに怒っているだろう」と思うと、あの時の少年の泣き声は今も聞こえるようでした。朱実は座敷に上がるとうつぶせになって、「おん、おん」と泣き出しました。

「読む会」当日読了後、朱実の泣き声が耳に残って、一同感慨に耽りました。二人の少年はなぜ泣いたのでしょう。乳母は「あんな笛でなくたって、新しいのをいくらでも買って上げますのに」と朱実をなだめました。それでもあきらめない朱実のために、乳母は「坊ちゃまにさしあげておくれ」と少年に頼みます。少年は「後でまた、いくらでも作ればいいじゃないか」と説得するおばあさんに抵抗します。「みかん」という貴い果物を上げるからという乳母の言葉にも耳を貸しません。少年の心にあつたのは、手作りの笛への少年の思いには無頓着で、朱実のわがままだけを聞き入れようとする理不尽な大人への憤りと言っているかもしれません。また、自分の言葉一つで、何でも手に入れようとする朱実に対する怒りだったかもしれません。一方、朱実は、少年の気持ちに気づいて自分を責める思いから泣きじゃくっていたのかもしれない。シヨウガを買ってやったことで、良いことをしたような気になっていた自分を恥じていたかもしれません。二人の少年は、泣くことによつて自分の思いを表せません。森三郎は泣き声の余韻と共に、読者の心にも波風を立てて、物語を終える手法を取っています。

この「笛」について、「三重吉」先生が非常に喜んで下さった。『いいものを書いてくれた』と、何度も何度も言はれる（1958.12、『新文明』）と三郎は述懐しています。唐土から日本に渡ってきた柑子のことを題材にした三郎の「みかん」（1932.1）の話も思い出されました。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品（十二月十一日実施予定）
「ピアノ」「祖母」（『森三郎童話選集 夜長物語』所収）